

第4回 日本医療催眠学会 名古屋大会 抄録集

生と死をみつめて ～今後の医療催眠の展望～



日 時 2016 年 9 月 11 日 (日)
AM10:00 ～ PM5:50

会 場 名古屋国際会議場
1 号館 3 F (133 + 134)
(名古屋市熱田区熱田西町 1-1)

主 催 日本医療催眠学会
大会長 橋元 慶男 (日本医療催眠学会 副理事長)

Japan Medical Hypnosis Association.

JMHA 日本医療催眠学会

「医療催眠を科学する」

橋元 慶男（大会長、日本医療催眠学会副理事長）

催眠という言葉に対する誤解と偏見は未だに払拭されない事情の背景には、催眠がきわめて清浄でありながら、異常に見える心理現象への科学的な説明不足がある。催眠は精神医学における医療現場で利用される一方、学習指導やスポーツ界のメンタル面において有効な援助法としても活用されている。

近年、脳の機能を観測・画像化する fMRI、PET、MEG 等のハイテク観測装置が著しく発展した。取分け医療催眠は 21 世紀人間科学のフロンティアであり、脳科学をはじめとする 21 世紀の新しい人間科学の連携によって催眠を科学する時代が来たといえよう。

心身の健康を教授する総合科学（メンタルサイエンス）として、心身健康科学という新しい学問領域の多面的なアプローチがある。QOL を創出するために必要な知恵としての Knowledge for well-being（「よりよく生きる」ための知恵）の概念が提示されている。

医療催眠学も世間の誤解や偏見を覆すパラダイムシフト（枠組み変革）への試みは、観察や実験による事実に基づく「科学的」な視点からの実証的な考察が必要不可欠である。

医療催眠学会における催眠研究者、催眠実践家の Evidence Based Hypnosis（科学的根拠に基づく催眠）を目指し、客観的な結果に基づき、実践的結果における科学的根拠を明快に示すことが催眠への誤解と偏見を正し、医療・福祉一般の場に適正に位置づける責務がある。

本日の先生方の発表を通じて、質疑など交えて親交を深めて頂きたいと思います。

催眠の新しい流れの一つ「ジェネラティブ・コーチング」について

萩原 優（日本医療催眠学会理事長、イーハトーヴクリニック）

【要旨】

第三世代の催眠と云われている「ジェネラティブ・コーチング」について、その成り立ち、今までの催眠との違いを明にして、その手技についても説明いたします。

「ジェネラティブ・コーチング」は、故ミルトン・エリクソン博士の現存する四大弟子の 1 人であるスティーブン・ギリガン氏と NLP の四大王の 1 人と言われるロバート・ディルツ氏によって創りだされました。

ジェネラティブとは新たに創造すること、いままで存在していなかったものを生み出すという意味です。

ジェネラティブ・コーチング（催眠）によって、クライアントを創造的な高い意識へと導いて行きます。その為に、人生での意図を設定し、変容を遂げ、それまでに経験した以上の結果を達成していく事を可能にしていくワークです。

今回、第三世代の催眠と云われるこの方法の考え方とその手技の概略を紹介いたします。

「意識の死後存続」研究が教えてくれる生と死の意味

大門 正幸（中部大学教授／バージニア大学客員教授）

【要旨】

1882年の心霊研究協会の設立に始まる心霊現象を科学的に解明しようとする試みは、1930年代以降のテレパシーや予知といったいわゆる超能力に焦点を当てた研究、1960年代以降の、生まれ変わり現象を中心とした研究、1975年以降の臨死体験を中心とした研究、1990年代以降のミディアム研究など様々な分野に分かれながら、多くの成果を生み出してきました。このような研究から 本人が知らないはずの故人に関する情報を正確に入手する能力を持つ者が存在することや、自分は過去生で別の場所に住み別の人生を歩んでいたと語る子供がおり、その人物について調査してみると、その子供のいった通りの人物が存在していたという生まれ変わり型事例や、退行催眠時に「過去生記憶」を想起する事例などが存在することがはっきりしています。

このような研究の被験者達は、実証可能な情報の他に、いわゆるあの世や人生の仕組み、生死の意味といった現時点では実証不可能な内容についても多くを語っています。

ここで次のように考えてみてはどうでしょうか。(i) 統制された実験下において、本人が知らないはずの故人に関する正確な情報を入手できるミディアムが語る生や死の意味については、信頼度が高いと考えられる。(ii) 本人が知らないはずの人物に関して正確な過去生記憶を持っている子供が語る生や死の意味については、信頼度が高いと考えられる。

こう考えて、信頼できるミディアムや子供達の発言に耳を傾けてみると、生と死の意味は凡そ次のようにまとめることができます。

私達の本質は物質ではなく心（魂）です。私達は大いなる存在の一部です。私達は成長のために目的をもってこの地上に生まれ、さまざまな体験を通して大いに学びます。死は終わりではありません。肉体という衣を脱ぎ捨てる作業にすぎないのです。私達を残して先立った愛すべき人達は消滅してしまっただけではなく、魂として別の次元にちゃんと存在し、場合によっては連絡を取り合うことも可能です。また、大いなる存在と一緒に私達を見守り、手助けをしてくれます。私達は肉体を脱ぎ捨てた後、再び地上を訪れ、衣装を着替えた役者が別の役を演じるように、異なる肉体をまとして別の人生を送ります。私達の旅は一人旅ではありません。深い絆に結ばれた魂同士は、同じ劇団がいくつもの異なる演目を演ずるように、異なる役割を演じながら別の人生を共にします。永遠なる成長、それが私達の生きる意味であり、目指す道なのです。 大変興味深いことに、この死生観は、実証可能な要素を含まない同様の体験をした数多くの人達が語る内容と共通しています。この点も上記の死生観が信頼に足るものであることを示唆していると考えられるのではないのでしょうか。

伝統芸の「謡」と縄文の「アワの歌」に共通した癒しのメカニズムについて

志賀 一雅（能力開発研究所）

【概要】

死を迎えている末期がん患者が「謡」を聴くことで、或いは患者自身が謡うことで癒されたり延命したり治癒したという報告をよく聞く。幸いにも京和文化協会から「謡」の脳波計測の依頼があり、観世流梅若能楽師 井上和幸 師匠の謡と脳波、謡を聴く人の脳波とを同時収録し分析した。また癒しの効果が高いと言われている縄文の「アワの歌」でも同様の脳波計測を行い、両者に共通している現象があるので報告する。

【本文】

謡は井上師匠の稽古に集う8人の協力で行い、アワの歌はいときょう氏の指導を受けた6人の協力で行った。測定は脳波 BF 装置2台とPCの脳波分析ソフトを用いた。

【実験方法】

- ① 井上師匠の右脳と左脳との脳波共鳴
- ② 謡う師匠と聴く人との脳波共鳴
- ③ 謡う師匠に合わせて謡う人との脳波共鳴
- ④ 謡を習う人同士の脳波共鳴などを計測した。アワの歌はシンガーソングライター入月真紀さんと参加者6名の協力を得て計測した。謡とアワの歌を収録し、音声と脳波の関連も分析した。

【実験結果】

謡とアワの歌に共通して右脳と左脳と7.8Hzで頻繁に共鳴した。声音には7.8Hzのビブラートがかかり倍音の印象を与えていた。二人の脳波共鳴は考えられないが、謡にしてもアワの歌にしても時々共鳴したことに注目したい。結果の解釈：7.8Hzはシューマン共鳴であり、電離層のプラズマ振動に起因する電磁場と脳波が共鳴して生体としてのあるべき状態にチューニングされるのではないだろうか。

「グリーフサポートのための3つの柱」

橋爪 謙一郎（㈱ジーエスアイ代表）

【要旨】

大切な人を亡くした死別体験者が、グリーフと向き合うために、「カウンセリングのテクニックやスキルを駆使すること」や「傾聴の姿勢」の重要性が強調されていることが多いのですが、それ以前に、向き合うための場所が安全と安心を感じられることが、必須条件です。

死別によって傷ついた人たちが、元気になるためには、湧き上がる感情を、たとえどんな風に表現したとしても否定されたり、攻撃されることなくあたたく受け止めてくれる安全な場が必要です。そして、いつの日かグリーフと折り合いがつくまで、逃げずに支えてくれると言う安心感のある人に思いを受け止めてもらうことによって、初めて向き合うことができるのです。

グリーフにあるクライアントを支えるための必要不可欠な「3つの柱」があります。

- ①グリーフの知識とコミュニケーションスキル（どんな知識やスキルが必要か）
- ②グリーフサポートマインド（支える人のあり方）
- ③燃え尽きを防ぐためのセルフケア（自分自身を知ること、癒すこと）

クライアントが、グリーフの状態にあることに気づき、その人がなぜ苦しんでいるのかを知るためにはグリーフの専門知識が必要です。さらに、支えるための信頼関係を築くには、コミュニケーションスキルを磨く必要があります。

また、支える側の信念やカウンセラーのあり方（Being）によって持っている知識やスキルの意味が変わってしまいます。同じ言葉を使っている、相手に伝わる時には、支える側が何を大事にしているのか、どのような価値観を持っているかによって、言い方や表現方法も変わり、それが態度にも現れてくるのです。支える人のグリーフサポートに対する考え方や心構え、信条ともいえるべき「グリーフサポートマインド」も支えるための大事な要素となります。

最後に、クライアントが悲しみと折り合いをつけるまで、継続した支えを提供するためには、常に自分自身が良い状態を保つ必要があります。クライアントに寄り添うために、相手の感情に近づいていくことによって、相手の思いや感情を抱え込み、燃え尽き（バーンアウト）した状態になることも少なくありません。私たちが最大限の能力を発揮するためには、セルフケアを習慣づける必要があります。グリーフサポートを始めとする心理的支援におけるセルフケアは、単なるストレス解消やリラクゼーションだけでは十分ではなく、「自分自身を知ること」によって、近づきすぎた状態から、いつでも本来の自分に戻ることができるのです。

今回の講演は、「グリーフサポートのための3つの柱」の基礎を身につけることで、グリーフにあるクライアントを効果的に支える基礎づくりにつなげていきます。

Between Life to Life 癒しの手法としての前世療法

石 原 均（医療法人エバーコンフォート 石原クリニック）

【概要】

日本のヒプノセラピストの多くは、ブライアン・L・ワイス博士の手法を用いて、前世医療法を行っているが、その多くは、前世を立証することではなく、よりよく生きるための癒し手法として行っている。13歳の引きこもりの少女の前世療法を中心に前世医療法の意義と中間世療法の重要性を報告する。

【本文】

前世医療法では、過去世と思しき人生の経過を体験した後に、クライアントのほぼ全例が、中間世と呼ばれる、肉体を離れた魂が安住する場所にたどり着く。この中間世でのワークは前世体験と同時にきわめて重要な意味を持つ。大半の例で次のような中間世療法を行なっている。

1. 肉体を離れてからの前世の振り返り
2. 高次元の存在との交流を行う。
3. 交流したい他の魂の存在と出会う。
4. 前世の自分とエネルギー交換を行う。
5. 前世、中間世での気づきを得て、future pacingを行う。

中間世でのワークを十分に行うことでクライアントが大きな気づきを得ることを多く経験する。今回、数多くの自験例の中間世療法の特徴を報告するとともに、13歳の引きこもりの少女が前世療法、中間世療法を体験し、引きこもりが改善しただけでなく、活発な学校生活を送るまでの経過について報告する。

乳がんと催眠療法

浦隅 百合香（ヒプノセラピスト）

【要旨】

これは、私が去年の2月に乳癌が見つかり、西洋医学の治療を受けながら催眠療法も行った結果、半年で癌が消えた体験です。去年の2月に受けた健康診断で乳癌が見つかりました。その1年程前に乳癌検診を受けた時には、影も形もありませんでしたが、もうその時癌の大きさは4cmでリンパに転移もあり、とても進行が早く再発のリスクが一番高い厄介なタイプの癌だと言われました。死と直面し不安で食事も摂れず、夜は眠れない日が続き、原因不明の左腕の痛みで悩まされていました。そんな時ヒプノセラピストの友人がソマティックヒーリングの勉強会で学んだことを私に話してくれました。

「癌は敵じゃないよ、癌に寄り添い、癌になった原因を知り、自分で自分を癒す事が出来るよ」そんな話の内容でした。私は電話を切って直ぐにお風呂に入り、それまで怖くて触れなかった癌のある左胸を撫で、自分で自分を抱きしめながら、今までよく頑張ってきたねと癒しました。涙が止まりませんでした。

すると不思議な事に、その日から朝まで眠ることができ、ずっと続いていた左腕の痛みが、朝起きると消えていました。いったい私の体に何が起こったのだろう？と思いました。あの不思議な感覚は今でも忘れられません。

そして、3月から抗ガン剤治療が始まり、5月にソマティックヒーリングを受けました。イメージの中で左胸にある黒い塊をセラピストさん達に抜いてもらいました。人生で初めての催眠体験で、その時は正直言ってこんな事で体に何の影響があるのかな？と半信半疑でした。

それでも8月の手術までに、前世退行2回・暗示療法・未来療法を受けました。ギリシャ人の前世では、現在の悩みが腑に落ち、また別の前世エジプト人の自分に、心と体を癒す白い羽根をもらい、前世を体験する事で少しずつ私の心が楽になっていきました。暗示療法のお陰で、手術の日も一度もドキドキする事なく、落ち着いて手術を受ける事ができましたし、未来療法では、一軒家に家族4人幸せに暮らしているイメージを見ました。でもその時は、そんな未来有り得ないと思っていました。

そしていよいよ手術となり、レントゲンで見ると癌はとても小さくなっていましたが、再発のリスクを考えて全摘手術を選びました。術後1週間程して病理検査の結果を知らされました。検査の結果、癌は1つも発見されませんでした。リンパにも転移していましたが、そちらも癌は検出されず。その結果を聞いて、奇跡が起きたー!!と信じられない気持ちでした。ガン発見から半年で、私の体の中からガンは消えていたのです。心と体は繋がっている事を体感しました。西洋医学と催眠療法の相乗効果で、私の体からガンが消えたと思っています。

そして最後に、退院して間もなく、ひょんなことから家を買う事になり、未来療法で見たイメージが現実となり不思議で仕方がありません。

「生死を超えて “いのち輝かせて生きる”」

米 田 晃（人間科学研究所）

【概要】

人が生きて行く上で、身近に色々なことが起って、悩みや苦しみが生じる。人間は、「心身共に……」と言うように、心と体を有する存在とされている。だから、自分は、自分の体（目に見える物質である肉体）を心（広い意味で意識と言う見えない存在）で認識、意識することによって自分の肉体を自分だと思っている。そして、自分は、自分の意志によって生きていると思っている。ところが、それは錯覚であって、生命は大宇宙によって生かされているのです。生も死も大宇宙のめぐり、永遠の“いのち”を輝かせて生きよう！

【要旨】

この世に生まれてくる事は奇跡と言える有り難いことである。ところが生きて行く上で、どうすることも出来ない事が色々起こってくる。これを一般に運命（命の運び）と言っている。生まれた国、時代、両親や家庭環境等、選ぶことが出来ない生れ落ちた星の下を宿命（命が宿る）と言うが、その人の人生は宿命や運命に影響されることが大きい事は確かである。このことは個としての肉体的、現象的な観念であり、高次元の見えない世界（魂の世界）から見ると魂が胎児に宿って生まれてきて、体験し、学ぶために、その願いに適う親を選んで生まれて来る。従ってそれから始まる人生には人や物、出来事など無常な関係（移り変わる身の周りの環境）の中で魂の願いを果たすべく無意識に選択がなされ意識では理解し難い状況（悩みや苦しみ等）が生じ運命を感じる。創造性開発の研究をする中で、脳の構造、働き（意識や直観）について学び、瞑想や共時的な体験から身の周りに起こる問題や悩み、苦しみは全て自分の脳（意識）が創り出している（意識が現象を創り出す）ことを実感するようになった。

宿命や運命は個としての肉体的な観念であり、色々なもの、ことを見聞きし、体験して、憎い、悲しい、苦しい……と思う心（感情）は、実態のない想念であり、身の周りに起こる問題や悩み、苦しみは全て自分自身（自我意識）が創り出している。現在の問題だらけの社会現象も、一人一人の意識が集合意識となって現象世界を創り出しているのがある。意識には肉体から生ずる意識、過去世の体験や執着から生じた魂の思い（業、カルマ）の自我意識（健在意識、潜在意識、無意識）、と本来の魂の願い（深奥の意識、真我）、そして生かされている“いのち”の根源の意識（超意識、宇宙意識）が存在する。意識波動エネルギーで言うと、荒い波動の肉体波動から、非常に細やかで高次元の波動（神の波動）が存在する。魂が肉体に宿って生まれてくるのは、純粋な魂の願いによって、創造行為が可能な現界（物質世界）で色々な体験をすることによって、魂を向上、進化させるためであるが、上記の肉体次元の制約を受けるので、自我意識や行動が、純粋な魂の願いとずれてきた時、それを気づかせ、導くために、病や災難など苦しみ（自我意識では悩みや苦しみとして感じる）を体験するのである。従って、身近に起こることは、全て必然で起こり、その人にとって意味あるオールOKの有難いことである。生も死も超えて永遠の“いのち”に目覚めて“いのち輝かせて生きよう”！

リセット「自律運動による自己回帰法」

ナナ&ジョーブライド (NPO 法人 TRE Japan 代表)

【概要】

RESET（リセット）（自律運動による自己回帰法）は、『ポリバーガル理論』（スティーブン・ポージェス／精神医学／米）を基盤に、東洋古来の身体療法を現代人のセルフケアや臨床場面にも使いやすい形にまとめた、安全でパワフルな療法です。

ESET(リセット/自律運動による自己回帰法)は、人間の持つ自然治癒・回復の機能である『自然な身体の振動や動き』促すことで、緊張やストレスを軽減して自律神経を整え、心と体のもつ可能性を引き出す療法です。人間本来の脳の働きを活性化します。

「西洋医学における医療催眠の可能性」

稲葉 俊郎（東京大学医学部付属病院循環器内科）

【概要】

現代医療の中で、医療催眠はまだまだ適切な位置づけがされていないのが現状である。様々な補完代替医療があるが、医療催眠は臨床的にとても有効な場合が多く、未来の医療のためにも現場で困っているすべての人のためにも、今後適切な形で現代医療の中に応用されていく必要がある。医療催眠の歴史を紐解きながら、現時点での問題点を建設的に考え、西洋医学の立場からの考察と提案を示したい。

【抄録本文】

人間は眠りと覚醒のリズムを生命システムの中に内在しており、人間が意識のリズムを持つことに催眠の本質がある。覚醒時は意識が外界へ向い、眠りでは意識が内界へ向かう。この二つの極をつなぐ意識状態の時に生命は更新・新陳代謝されており、そのあわいの意識状態を医学的に応用して「医療催眠」は心理療法としても機能する。ただ、娯楽を目的とした舞台催眠（ショー催眠、催眠術）の奇異な側面や、催眠商法など洗脳的な悪用例のため、医療催眠は適切な形で理解されていない。日本でも明治末期に「催眠術」が流行したが、倫理観が欠如したもの、娯楽目的が氾濫したせいで一気に沈静化した反省すべき歴史がある。現代医療は覚醒時の人間を主に対象としているが、睡眠時や催眠時の意識の状態も含めて対象にすることで、医療催眠は死のグリーフケアや心理療法として、人間への深い理解にも大きな可能性を秘めたものである。現時点での問題点と展望を共有したい。

[illegible]



プログラム

9:00～ 開場

9:30～ 受付

9:00～ 9:50 笑いとお癒しのセッション

10:00～10:05 開会の辞 (大会長 橋元 慶男)

10:05～10:35 萩原 優 催眠の新しい流れの一つ「ジェネラティブ・コーチングについて」

10:40～11:30 大門 正幸 「意識の死後存続」研究が教えてくれる生と死の意味

11:35～12:05 志賀 一雅 伝統芸の「謡」と縄文の「アワの歌」に共通した癒しのメカニズムについて

12:05～13:05 昼 食 (理 事 会)

13:10～13:25 学会総会

13:30～14:20 橋爪謙一郎 グリーフサポートのための3つの柱

14:25～14:55 石原 均 Between Life and Life 癒しの手法としての前世療法

14:55～15:05 休 憩

15:05～15:20 松尾沙都呼 ハープ演奏

15:25～15:55 浦隅百合香 乳がんと催眠療法

16:00～16:30 米田 晃 生死を超えて “いのち輝かせて生きる”

16:35～17:05 ナナ&ジョーブライト リセット「自律運動による自己回帰法」

17:00～17:50 稲葉 俊郎 西洋医学における医療催眠の可能性

17:50 閉会の辞

18:00～20:00 懇親会 〈懇親会場〉 1号館7F [パステル] tel.052-683-7731

【大会事務局】(連絡先)
名古屋市中区丸の内 1-11-2
リーヴァストゥーディオ丸の内 701 号
紫紋かつ恵: (090)1725-5587
info@shimon1.com

【主催】 Japan Medical Hypnosis Association
JMHA 日本医療催眠学会
〒225-0002 横浜市青葉区美しが丘 2-18-9
ニューライフビル 202 イーハートクリニック内
(TEL 045-902-7240, FAX 045-482-7620)